

縦と横の語彙研究 — 《醒世姻縁傳》 方言語彙研究

植 田 均

- 0. なぜ《醒世姻縁傳》を取り上げたか？
- 1. 何を問題としたか？
- 2. 南方方言と北方方言
 - 2.1. 現代共通語では「別の語に代替された」語
 - 2.2. 現代共通語では「同形異義語」

0. なぜ、《醒世姻縁傳》を取り上げたか？

「縦」とは歴史的な角度から、「横」とは地理的角度からの取り組みを意味する。中国語の歴史は、古代漢語、中世漢語、近世漢語、現代漢語と変遷してきたが、現代漢語の直接の祖先は近世漢語である。

近世漢語の一資料として明清白話小説を取り上げる場合、当時の官話（＝通語）の大枠に入るものでも北方と江南の如き地理的観点に立たざるを得ない。したがって、北方と江南の二大分類を行い、時代順に主な明清白話小説を挙げれば次の表の如くなる。¹⁾

官話 (=通語) 資料	北方：《金瓶梅詞話》→《醒世姻縁傳》→《石頭記》→《程甲本紅樓夢》→ 《兒女英雄傳》→《官話類編》、《語言自邇集》
	江南：《水滸傳》→《拍案驚奇》→《儒林外史》→《官場現形記》、 《二十年目睹之怪現狀》
方言 資料	：《海上花列傳》、《九尾龜》等。

我々は、講義で現代漢語を教授しているゆえ、つまるところ「現代漢語の解明」に尽きる。現代漢語解明のアプローチは、1つは「共通語と方言の比較」によるもの、もう1つは「外国語との比較」、つまり、中英、日中などの言語比較である。この他に「現代漢語の直接の祖先との比較」がある。筆者は、今最後に挙げた「現代漢語の直接の祖先」である近世漢語に取り組む。

近世漢語の中の《醒世姻縁傳》（以下、《醒》と略称）を選出した理由は以下1)～3)の通りである。

- 1) 《醒》は、明末清初頃、山東人（作者不詳）によって成書された。これは約100万字を擁する大部小説であるが、筆者がこの資料に着手した1990年頃はまだ日本語の翻訳本も刊行

されていず、研究対象にする人はごく限定されていた。しかし、《金瓶梅詞話》から《紅樓夢》へと語彙の歴史が流れて行く上において橋渡的な位置にあるので、重要な口語資料であると考えられる。

- 2) 筆者は、以前、《金瓶梅詞話》語彙研究をしていたが、中国で先に白維国《金瓶梅詞典》(中華書局, 1991年)の如く、《金瓶梅詞話》の辞典類が多く刊行という形で成果が出された。よって、《金瓶梅詞話》よりも未開拓の要素がまだ多い《醒》に変更した。
- 3) 《醒》の語彙は《金瓶梅詞話》と共通する、或いは類似するものが多い。同じ山東人による(山東方言が多く散りばめられた)書だからであろう。したがって、《金瓶梅詞話》の語彙研究と大きくはかけ離れてはいない。

1. 何を問題としたか?

《醒》の中の語彙が現代漢語の共通語に非継承のものに限定した。ただし、各方言の中には現代にも依然継承・残存している語彙である。それはどういう語彙か?いかなる特徴があるのか?また、《醒》から現代漢語まで(北方方言系資料を用いて)どのような変遷を経てきたのか?この2点を明らかにしようと試みる。

語義の変遷

古代漢語、近世漢語、現代漢語という大枠の中で語義の変遷は次の表の如くなる。

	古代漢語	近世漢語	現代漢語
A	食(肉)	食(肉)	共通語 -× (“吃肉”) 方言 -○ (南方方言, 如粵語)
	著(衣)	着(衣)	共通語 -× (“穿(衣服)”) 方言 -○ (南方方言, 如粵語)
B		渾身 渾深 (=渾身)	共通語 -○ (=“全身”) 方言 -○ (非南方方言, 如魯語=“反正”)
		拾(餅) 拾(餅)	共通語 -○ (“拾得<餅子>”) 方言 -○ (非南方方言, 如魯語=“买<餅子>”)

残存・継承の特徴

近世漢語の“食肉”及び“着衣”は古代漢語にも存在する。このような語は、現代漢語に残存・継承されている場合、粵語などの南方方言に見られ、Aタイプに属する。また、古代漢語に見られない“渾深”(“渾身”(=“全身”)や“拾(餅)”(=“買(餅)”)は、現代方言の山東方言を含む北方方言に残存・継承されていて、Bタイプに属する。A、B両者には明らかに「差」がある。

2. 南方方言と北方方言

《醒》中の語彙は多く現代北方方言に継承されている。山東人が書いた書ゆえ、当然であろう。しかし、幾つかの語彙は、現代漢語では南方方言に継承されている。例えば粵語、閩語などにである。この種の語彙はほとんどが文言に出自があるようである。上記表のAタイプである。

2. 1. 現代共通語では「別の語に代替された」語

先ず、文言に出自がある語をいくつか取り上げる。このうち、現代共通語では「別の語に代替された」のが“面”、“箸”、“食”、“寝”などで、これらは近世漢語の北方資料の中で出現頻度数が問題になる。どの時代で現代共通語に通じる語（“臉”、“筷子”、“吃”、“停止、平息”）が出現し、優勢となつて行つたのか、即ち、どの時代で、どちらの語の出現頻度に優勢、劣勢などの変化がみられるか、である。

面 — 現代漢語の用法：釈義「かお」。共通語では、単に四字成語等の「決まり文句」の中のみ用いる。一般に単独一文字では用いられない。

基本的に“臉”を用いる地域：官話方言（北京、済南、西安、太原、武漢、成都、合肥、揚州）、湘語（長沙）、贛語（南昌）。²⁾

“面”を使用する現代方言地域は南方方言：吳語（温州）、湘語（双峰）、客話（梅县）、粵語（廣州、陽江）、閩語（廈門、潮州、福州、建瓯）

近世漢語：《醒》は全て非会話文に使用。（口語性の強い会話文では“臉”を用いる）。近世漢語からの用例。

將就洗了手面。《醒》3. 10b. 9）（いい加減に手や顔を洗う）

《金瓶梅詞話》、《石頭記》、《兒女英雄傳》→“面”は一般に非会話文に使用されている。この時代、既に書面語であることを示す。

舀水淨面畢。《金瓶》72. 5b. 4）（水を汲んで顔を洗い終える）

平兒自覺面上有了光輝。《石頭》44. 6b. 2）（平兒は顔に輝きを生じた）

羞得他面起紅雲。《兒女》9. 11b. 8）（彼女（＝張金鳳）の顔には赤味がさした）

“洗面”（連語）について。

連語“洗面”は、《醒》ではすべて非会話文に使用されている。

又使冷水洗了面。《醒》9. 4a. 8）（冷水で顔を洗った）

ただし、熟語の類（＝慣用語）は会話文中でも「決まり文句」“洗面”を使用する。その例を挙げる。

“光梳頭淨洗面”（《醒》4. 2a. 3）（《醒》44. 6a. 10）（髪を綺麗に梳かし、顔を綺麗に洗う）

另洗了面。《石頭》72. 10a. 1）（新たに顔を洗ってあげた）

《兒女英雄傳》、《官話類編》、《語言自邇集》→会話文、地の文併せ、全て“洗臉”を使用する。19世紀の北方では“洗面”はもはや非会話文でも用いないようである。

“臉”、“面”の歴史

時代	春秋 戦国 漢代 唐代 宋代 元代 明代 清代 現代
[北方] 面 (=かお)	—————→—————
[北方] 臉 (=もとは “脸蛋儿”)	—————→ 「顔」を示す
[南方] 客話、粵語、閩語等	：現在でも“面”を使用。“臉”を不使用。

宋～清代：「かお」は“面”から“臉”へと徐々に移行する。ただし、両者は併存する。

“臉”は狭い範囲の「ほお」から拡大の「かお」へと変化した。拡大開始が宋代、変化の完成は清代と見られる。また、唐代が意義の変化の過渡期と思われるので、唐五代の口語を反映する《祖堂集》などの口語資料を検討する必要がある。

四字成語と慣用語（熟語）の中では、“面”、“臉”は現代漢語においてどのような差が見られるか？

“面”：四字成語（典故あり）の中での使用に限定→四字成語は古代漢語で使用されていて、文言である。

“臉”：慣用語、熟語（典故があるとは限らない）の中での使用が多く、成語ではもちいられない←「慣用語、熟語」は通俗で比較的新しい用法である。

箸 — 現代漢語：釈義「はし」。共通語では書面語である。

現代方言の地域：南方方言（呉語南部の温州、客家語の梅県〈箸只〉、閩語の廈門、潮州、建瓯）で使用。

《醒》：箸<筷子。《醒》では“筷子”よりもまだ“箸”の方が優勢。会話文でも“箸”を使用する。

“再取一雙箸來， …。” (29. 8b. 2) (もう一膳箸を持ってきてくれ)

近世漢語：《金瓶梅詞話》、《石頭記》、《兒女英雄傳》での“箸”の様相は少々生硬である。

“箸”→非会話文で使用されるゆえ、生硬、非生産性である。ただし、より口語性を高めるためか、接尾辞“兒”、“子”を伴っている。

舉箸兒纔待讓月娘眾人吃時， …。(《金瓶》 89. 7b. 7) (箸を取って月娘達に食事を勧めようとしていた矢先、…)

劉姥姥便伸箸子要夾， …。(《石頭》 40. 7a. 9) (劉お婆さんは手を伸ばして箸で挟もうとしますが、…)

“筷子”→現代共通語では、会話文、非会話文に関係なく“筷子”を用い、“箸”は用いない。

近世漢語の《石頭記》では、一般に会話文に使用。

誰這會子又把那個快子拿了出來。(《石頭》40. 7b. 3) (快子=筷子) (誰じゃ? この時にまたその箸を持ち出したのは!)

《兒女英雄傳》: “箸子” → 会話文の場合、田舎者の登場人物(張金鳳の母親)に使用が限定されている。

我吃上箸子就算開了齋了。(《兒女》29. 23b. 10) (わたしゃ箸をつけるだけで精進落としをしたということなのよ!)

《兒女英雄傳》: “筷子” → 非会話文、会話文の両方に使用という如く、“箸”、“箸子”はほとんど見られない。《兒女英雄傳》では“筷子”への交替のほぼ完了と思われる。

《官話類編》、《語言自邇集》→ “筷子”を採用し、“箸子”、“箸”は不採用とする。清代後期(1850年頃)に成書の《兒女英雄傳》でも同じ様相を呈しており、19世紀の北方では既に“箸”から“筷子”へ交替が完了していたと思われる。

食 — 現代漢語: 積義「食べる」。規範的辞典類では一般語語彙とするが、書面語語彙だと思われる。

現代方言の地域: 粵語、客家語、閩語などの南方方言地域では口語で使用されている。なお、“食”は、これらの南方方言では“食”に“吃飯”、“吸烟”、“喝水”の3種の積義がある。

《醒》では動詞“食”の使用はごく少ない。一般には“吃”を用いる。しかも、生硬な非会話文にのみ使用である。その例。

寢則同房, 食則共卓。(《醒》15. 1a. 8) (寝るときは同じ寝台、食事も同じ机でおこなった)

《金瓶梅詞話》、《石頭記》、《兒女英雄傳》における“食”の会話文における例を下に挙げる。ただし、《醒》と同様、出現数はごく少数。多くは同義語“吃”、“喝”を使用している。“食”の例。

近年還沒食這個哩。(《金瓶》52. 14b. 3) (今年まだこれを食べておりませんぜ!)
這是食螃蟹絕唱。(《石頭》38. 18b. 6) (これはカニを食べるときの傑作ですね!)
且食蛤蜊。(《兒女》30. 9b. 6) (まあ、蛤でも食べて!)

*積義「飲む」では、《石頭記》が“吃”から“喝”への過渡期の様相を示す。《石頭記》よりも後に出現した《兒女英雄傳》は“喝”の使用が多い。また、「口の中へ入れるもの」のうち、液体は“喝”、固体は“吃”の如く、多く使い分ける。その例。

跪下, 我就喝。(《石頭》44. 1b. 10) (跪きなさい。そうすれば飲んであげるから)
咱們喝點兒粥, 吃點兒東西睡罷。(《兒女》20. 20b. 8) (お粥でも啜って、何かものを食

べて寝ることにしましょう)

《程甲本紅樓夢》(1791年刊)の高鶚著とされる後40回の箇所は前80回(《石頭記》)よりも更に時代が下がる。ゆえに、そこでは“吃”よりも“喝”の使用が圧倒的に多い。

寝 — 《醒》での積義は“停止、平息”(本義は“躺着休息”)を示す。

現代共通語では“就寝”、“寢食”、“寢室”のごとく、“寢”(積義「眠る」,「寢室」)は生硬な用法でしかない。

《醒世姻缘传作者和语言考论》(徐复岭、齐鲁书社、1993)が“本为文言, …, 在兖曲方言中仍保留下来”と言うように、“寢”はもと文言であった。近世漢語の《醒》に積義“停止、平息”が見え、現代山東省兗州、曲阜方言に継承されている。

《醒》の例。

见寢了这事, 大失所望. (《醒》84. 9a. 6) (この事をやめにしたと知り、大いに失望した)

次に、現代共通語でも「別の語に代替される」ことなく用いられている語について。

2. 2. 現代共通語では「同形異義語」

元の語形は古今を通じて変化しないが、語義が大きく変化する所謂「同形異義語」を示す。

湯 — 現代漢語：積義「ゆ」。現代共通語では、1字単独で用いない。(現代共通語の積義は「煮汁＝スープ」)

現代方言の地域：福州・建瓯(滾湯)、温州(茶湯)等の南方語。

近世漢語：《金瓶梅詞話》は下記の例の如く、《水滸》の名残の章回(第1回～9回)、及び南方人の補作の章回(第53回～57回)にのみ出現する。これは、南方語の用法の反映だと思われる。即ち、《金瓶梅詞話》当時の北方語ではなじまない用法である。

近世漢語の例。

士兵起來燒湯. (《金瓶》9. 6a. 9) (従卒は起きると湯を沸かした)

又燒些熱湯. (《金瓶》54. 14b. 5) (また湯を沸かしていた)

《醒》の“湯”は“煮汁”用が多く、“開水”用は少ない。“開水”の例。

在爐上湯内嘮熱了. (23. 5b. 8) (炉の湯の中で爛をした)

《石頭記》は、単音節語“湯”は会話文では用いられない。必ず、他の要素が加算される。

如下：

舀了面湯. (《石頭》77. 16a. 5) (洗面用の湯を汲んだ)

不要湯婆子. (《石頭》51. 6a. 3) (湯たんぼはいらないのよ)

加算された要素は、上記例では“面”であり、“婆子”である。これらの要素が加算されなければ、“湯”の積義は「煮汁」になる。

《兒女英雄傳》も同じく単音節語“湯”は「煮汁」となり、複音節語“湯水”は“開水”、“熱水”を示し、区別して使用する。

叫人取些熱湯水。(《兒女》20. 1a. 8) (熱い湯を取りに行かせた)

又給了他些湯水喝。(《兒女》3. 15. a. 1) (坊ちゃんにお湯を飲ませた)

なお、“達、達達、大、大大”(おとうちゃん)の如く、文言に出自を求められないものは、一般に現代北方方言に継承されている。

[注]

- 1) 官話資料を「北方と江南(南方)に分けない」方がよいという意見もあるだろう。しかし、この表に挙げた通り、官話の中においても「北方と江南」に分けている。それは、歴然とした語彙上の根拠が存在するからである。
- 2) 方言点は主として《漢語方言詞匯(第二版)》(北京・語文出版社)を用いる。以下、同じ。

[文献]

- 西周生,《醒世姻縁傳》(線装全二十冊),人民文学出版社,1994年第2次印刷影印本(1988年第1版第1次印刷)。
- 西周生,《醒世姻縁傳》(全五冊),「古本小説集成」所収,上海古籍出版社,1994年。
- 笑笑生,《金瓶梅詞話》(萬曆本),大安(影印本),1963年。
- 曹雪芹,《脂硯齋重評石頭記》,中華書局香港分局,1977年版。
- 曹雪芹、高鶚,《程甲本紅樓夢》,書目文獻出版社,1992年(影印本)。
- 文康,《兒女英雄傳》,「古本小説集成」所収,上海古籍出版社,1994年。
- 徐復嶺,《醒世姻縁傳作者和語言考論》,齊魯書社,1993年。
- C. W. MATEER,《官話類編(A COURSE OF MANDARIN LESSONS)》,SHANGHAI:AMERICAN PRESBYTERIAN MISSION PRESS,(ABRIDGED EDITION)1916年([FIRST EDITION,1892年],[SECOND EDITION,1898年])。
- FRANCIS THOMAS WADE,《語言自邇集》(第2版)[張卫东譯],北京大學出版社,2004年(原版:1886年)。
- 植田均,《『醒世姻縁傳』方言語彙研究—現代方言に残存する『醒世姻縁傳』中の語彙》,大阪市立大學大学院文學研究科博士學位論文,2007年1月提出(未公刊)。
- 北京大學中國語言文學系語言學教研室編,《漢語方言詞匯(第二版)》北京・語文出版社,1995年。

* 本稿は、2007年9月8日、福建省・福建師範大學・外國語學院で口頭発表したものに少しく加筆した。当日、貴重なお意見を戴いた林璋教授、胡稔副教授をはじめ、臨席された関係

植 田 均

各位に感謝致します。

The Lexicology of Time and Space in Chinese.